IS 夢の果ての殺人貴

油ドン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　夢の果ての殺人貴

【Ｎコード】
Ｎ５６７１Ｕ

【作者名】
油ドン

【あらすじ】
前回のプロローグ１で短編小説として誤って投稿してしたったことについ先ほど、気づいた件・・・俺だせぇ・・・ｏｒｚ
ってな感じでプロローグ２です。
次からは本編に入れたらいいなと思ってます！
まぁ、構造が浮かばんので先になると思いますが・・・ｗ
ではごらんください。

プロローグ1（前書き）

指摘がありましたのでプロローグ1を統合します。読みづらいでしょうが、配慮にいれて読んでいただくことをお願いいたします。

プロローグ1

とある城を守る死神がいました。
彼は幾度も幾度も魔王と呼ばれた彼女の敵を排除してきました。
しかし、守ろうとした最愛の彼女が暴走し、それを抑えるために彼女を彼は殺しました。
彼は涙しながら、彼女の名前を呼び、泣き叫びました。
しかし、彼女はやさしい声で「ありがとう、志貴・・・」といいました。
志貴と呼ばれる青年は泣き叫び彼女が死ぬまで隣にいました。
「アルクェイド・・・・俺は・・・・もう・・・・」
そして青年も彼女(アルクェイド)の遺体を誰にも見つからないように隠し自らも姿を消しました・・。
そして、世界は震撼した。魔王とその守護の死神が姿を消した、という事実に・・・。
これはその死神呼ばれた青年、志貴が時を越える物語である・・・。

プロローグ1（後書き）

プロローグ1です、今まで放置しててすいませんでした（；＾ω＾）

テストも終わったのでこれから書いていこうと思いますのでよろしくお願いします。

ぶっちゃけ、うた☆プリにハマってしまったので保障できませんが・・・w

プロローグ2（改）（前書き）

プロローグ2です。
文章を書く上でこうしたほうがいいよって方はどんどん、アドバイスをお願いします。
すっげぇよろこんで次につながりますので！！w
感想を元に修正いれてみました。
どうでしょうか？

プロローグ2（改）

彼女（アルクェイド）の遺体を隠した後、志貴は城を出る前に最後の別れのように彼女がいた空間を眺めました。
「アルクェイド・・・、さようなら・・・・・。」
そうして出口へと振り返ろうとした時・・・・、謎の光が突如、志貴の目の前に現れた。
「なんだ・・・、この光・・・・・？」
志貴は疑問に思いながらも警戒しつつ光を観察しました。
すると、突然光が志貴を覆うように迫ってきた。
「っな・・・、冗談じゃない！！」
志貴はそう言い、すぐさまバックステップで後ろへ回避しようとしたが、
「この光・・・、速度が速い・・・・・！」
志貴は光に飲まれそうになり、「眼」の包帯をとり、
「くっ・・・！一か八かだ！」
包帯を取った志貴の眼はとても深く蒼い眼でした。
「線がないっ・・・！、なら、点はどこだ・・・！」
そう志貴は叫び、集中して光の「点」を探し出そうとしました。
光に飲まれないように、柱などを蹴りながら移動し、「点」に意識を集中させた結果、
「・・・っ、見えた！・・っな！」
志貴がそう叫んだ瞬間には光は志貴を覆いつくす寸前でだった。
「なら、これで・・・！」
志貴は懐から一振りのナイフをだし、
「点を・・・突く・・・・・！」
腕を伸ばし、点を突くことに成功したが、
「なっ・・・！消えない・・・！」
光は変化なく志貴を覆いつくし、

「こんな・・・とこ・・・ろ・・・で・・・・っ！」
志貴は薄れいく意識の中叫び、意識を失った・・・。

プロローグ2（改）（後書き）

よし、次もがんばる！
修正後の感想も受け付けてます！

世界を超え・・・（前編）（前書き）

書いてて思った。今回は特に説明回すぎるって・・・ｗ
しかも、書いてるときに寝て深夜になったしｗ完成したのがｗｗｗｗ
まぁ、見てくださるとうれしいですｗ

世界を超え・・・（前編）

世界はに篠ノ之 束（しののたばね）よって発明された「Ｉ・Ｓ」によって激変した。
「Ｉ・Ｓ」とは通称「インフィニット・ストラトス」といい、宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツである。
しかし、世界はこの「Ｉ・Ｓ」を認めなかった。
だが、「白騎士事件」をきっかけに世界は「Ｉ・Ｓ」を受け入れた。
しかし、製作者である束が突如、姿を晦ました。
束が姿を晦ましたことにより、世界には４６７個のコアが残った。
各国はこれを分配し抑止力として使った。
各国からは国家代表候補生や代表候補生などが専用ＩＳを与えられるため特別視されていた。
そして、某Ａ国が「日本が起こした事態なんだから、自分の国で責任とって技術や育成所をつくれや、あ、金は自国でだしてね」と、ヤクザばりの要求をした。
そして、できたのが「Ｉ・Ｓ学園」である。
「Ｉ・Ｓ学園」とは、各国から集まった代表候補生やＩ・Ｓ操縦者を育成する学校である。
そして、教員もまた、元候補生などで構成されていたりする。
織斑千冬もその教員の１人であった。
「山田君、入学式も含めて後１ヶ月ちょっとを切ったが、資料や授業の準備などはどうだ？」
と千冬に呼ばれた山田先生は
「はい、資料などは問題ありません。」
と答えた。
「わかった、では、職員会議も一段落したし、休憩にしようか」
と千冬が言うと、
「はい、織斑先生はコーヒーでよろしいですか？」
と答える山田先生。

「頼む」と一言言う千冬だった。
「しかし、あのバカはやってくれたな・・・。」
「弟さんのことですか？」
「あぁ、どこのバカが「藍越」と「I・S」を間違えてしかも「I・S」を起動させるやつがいる？」
とため息を漏らしながら千冬がいうと、
「あはは・・・」
と言いながら苦笑いした山田先生だった。
2人で雑談しながら休憩していたが、
突然、中庭の方で光が発生し消えたので、
「お、織斑先生・・・！」
「山田先生・・・、いくぞ」
と2人は至急中庭に向かった。
「っ・・・ぐっ！？」
志貴はふと、目を覚ました。
「ここ・・・は、どこ・・だ？」
まだ、はっきりしない頭で回りに確認を行おうとすると、
「ここら辺に光が落ちませんでした？」
「あぁ、このあたりだな」
「っ・・・！」
遠くからこちらに2人の女性の声が迫ってくるのを感じた。
「（・・・どうする？ここは大人しく話し合うか・・？）」
志貴は頭で考えた。
「（ここがどこかは、わからないし・・・、素直に従うか・・・）」
志貴は何があってもいいように警戒態勢で相手が現れるのを待った。
「織斑先生！、ここです！って、え・・？」
「どうした？山田先生？」
と山田先生のキョトンとした声に不審に思った千冬が聞くと、
「お、織斑先生、何も残ってません・・・」
「何・・・？」

と山田先生の声に、警戒をしつつ確認した千冬。
「（とは、言ったものの、つい気配を消して隠れてしまった・・・トホホ・・・）」
と、志貴は内心で思った。
「（ここからでるにしても・・・どんな施設かも把握してないし、あと、この景色自体が見たことないよな・・・・）」
と志貴は思った。
考えに没頭してたせいか、足元にあった小枝に気づかず踏みつけ、
「バキッ」
「あっ」
音を立ててしまい、
「誰だ？出て来い」
とばれてしまった。
「（あぁ～、やっちまった・・・。）」
と志貴は木の影から姿を現した。
「貴様、どうやってここに進入した・・・？」
威圧しながら、志貴に質問した。
「どうやってって、言われても・・・気づいたらいたとしか言いようがないですよ」
と志貴は答えた。
「なんだ・・・？お前は・・・・？」
そう、千冬は志貴の異様な格好に違和感を感じた。
全身が黒一色に統一された衣装、眼には包帯らしきものをつけた青年に。
「もう一度聞くが、どうやってここに進入した？」
千冬が志貴聞くが、
「何度もいいますけど、俺だって気づいたらここに飛ばされたんですよ・・・ハァ・・・」
「飛ばされただと・・・・？」
志貴の発言に千冬が食いつき、

「えぇ・・・（よくよく、思い出すとそれ以外考えれないからなぁ・・・）」
「まぁ、飛ばされた理由はわかりませんがね・・・」
「まぁ、いろいろ聞きたいでしょうが、まずこちらから質問です」
志貴がいい、
「何だ」
千冬が答える。
「もう一度聞きますよ、こちらも、ここはどこですか？」
「何？、「Ｉ・Ｓ学園」だぞ？ここは」
「だから、そのＩＳ学園がなんなのかを教えてもらえませんか？」
「お前は、知らないのか・・・？」
「えぇ、さっきも言ったとおり、俺はここに飛ばされたんです。別の世界からね・・・」
「別の世界だと・・・？」
「えぇ・・まぁ」
「それより、この世界のことを教えてくれませんか？」
志貴が聞くと、
「ふむ・・・、信じがたいが今、ここにいる時点で信じるしかないか・・・・」
どこか納得できてない顔でそう言った。
「わかった、この世界についてお教えよう、ただし、お前の世界についても聞くぞ。」
千冬がそういい、
「俺が説明できる範囲ではならいいですよ」
と志貴が答えたのを聞いて
「よし、この世界だが―――」
千冬がこの世界についてを教えると、
「なるほど、その「ＩＳ」がスポーツとして運用され、まぁ、代表候補生でしたっけ？を育成するための学園がここなんですね」
志貴は関心しながら、その話を聞いていた。

「さて、今度はお前の世界についてだが・・・、」
「だが？」
「その前に、名前を聞いていなかったな」
「あぁ・・・」
「私は織斑千冬だ、ここで教員をやっている。で、こちらが山田先生で私の副担任になる人だ」
「は・・・、初めまして・・！山田真耶です・・・・！」
2人は名前をいい、志貴の番になり・・・、
「（あぁ・・・「名前」なんて久しぶりだなぁ・・・）」
頭の中でそう懐かしみ・・・
「俺は・・・俺の名前は・・・」
そう、自分の名前を思い出すように、
「名前は―――七夜、七夜志貴だ」
そう答えた。

世界を超え・・・（前編）（後書き）

さて、なんか、流れ的にここで切ったけど、後編どうしよw考えてないっすｗｗ

世界を超え・・・（後編）修正というか変更（前書き）

さて、後編ですよ。前回が説明しすぎたのでなるべく説明回にならんよう気をつけます＾＾；
この小説での志貴は基本原作に沿いたいのですが、月姫のアルクトゥルーＥＮＤを知らない上にほとんど二次設定とかで書いてるんで、おかしな部分もあると思いますが、そこらへんを考慮して見てくださるとうれしいです。
感想でやはり、ナイフがＩＳという設定は無茶苦茶では？とあり、感想読んで自分もやらかしたと思ったので修正と変更をしようと思います。ぶっちゃけ改稿の仕方しらんからやるんですがね・・ｗ

世界を超え・・・（後編）修正というか変更

「さて、七夜」
千冬が志貴に言う
「俺の世界についてですよね？」
と志貴は答えた。
「あぁ」
千冬返答を聞くと、
「俺がわかる部分でしか話せませんのであしからず」
と前置きをして、
「まず、俺の世界ではここまで科学が進歩していません。さらに、戦争もまだ続いてた時代です。」
志貴は自分の世界について淡々と答える。

説明がすごくめんどくさいので省略

「まぁ、俺の世界についてはこんな感じですかね」
「にわかには信じられんが、七夜を見る限り信じるしかないか・・・」
志貴の格好を見ながら千冬は答えた。
「しかし、会ってたから疑問に思っていたが、その目を覆っている包帯はなんだ？」
千冬が疑問に思っていたことを口にだすと。
「あぁ、俺の「眼」は特殊なものでして、この包帯で抑えてるんですよ」
と志貴の答えに
「見えているのか？」
千冬がさらに聞く
「えぇ、この包帯自体も特殊なんで見えてますよ、ちゃんと」

「外すことはできないのか？」
千冬が聞くと、
「まぁ、大丈夫でしょうからいいでしょう」
と、いい包帯を外した志貴だったが、
「っ・・・？（おかしいぞ、線と点は見えるけど、頭痛がなぜかしない・・・？）」
疑問に思ったが包帯は外した。
「ほぉ・・・」
「綺麗な青色ですねぇ・・・」
と2人とも別々の感想を述べていたが、当の本人の志貴は・・・
「（頭痛がしないのは好都合だけど、なぜだ・・・？）」
と疑問に思い考えていたが、
「（まぁ、頭痛がしないなら気にすることはないか・・・）」
と1人で結論付け千冬たちに視線を戻した。
「で、一番確かめたいことがあるんですが・・、」
志貴が言うと、
「なんだ、言ってみろ。」
千冬が答えた。
「俺って、どうなるんですかね？」
一番の問題点を暴露した。
「うむ、ＩＳは持ってないんだろ？」
「えぇ、というか、男は使えないじゃないですか・・・」
と当たり前の会話をした。
「何か他にっているものとかはないのか？」
千冬の質問に志貴は
「持っているのは、これぐらいですよ」
と懐から長年使っている「七夜」と彫られたナイフを出した。
ナイフを取り出して千冬に見せた。
「ふむ、確かに、それ以上は何も持っていないな。」
千冬が確認した。

他に確認することがなくなった千冬は志貴にこう告げた。
「あと、七夜」
「はい？」
「お前の処置が一応決まったぞ。」
「え？いつそんなこと決まったんですか？」
「山田先生に頼んでおいたのでな」
志貴はハッとなり、もう1人の女性を探すが・・・
「あれ？さっきまでいたのに・・・」
いないことに今更、気づき千冬の考えに驚いていた。
「ＩＳ学園には寮があるのでな、そこの寮長の部屋に間借りという名目で許可がでた。」
「え？寮長とか、無理ですよ？俺には？」
志貴は若干、嫌な予感がするなぁ・・・と思いながら千冬に聞いた。
「何、問題ないさ。入学式まで時間はたっぷりあるしな・・・」
千冬がニヤリとした顔を向けたとき、志貴は悟った・・・。
「（あぁ・・・やっぱり俺ってこういう女性とよくあうよなぁ・・・）」
と半ば諦めた思考を展開していた・・・。
志貴はとある一室で待機していた。
「はぁ・・・、何か大変なことになってないか・・・？」
今更感がバリバリだが。そう思うしか納得できない志貴だった。
「何、問題ないさ、基本的な知識だけなら1週間で覚えれるさ。」
千冬のニヤついた顔で志貴のいる部屋に入ってきたので志貴は諦めた顔で
「俺はそんなに、頭はよくないのでお手柔らかにお願いしますよ・・・。」
と答えた。
「ふっ・・・、覚悟しておけよ？」
千冬の言葉に志貴は引きつった笑顔で答えたのだった。

世界を超え・・・（後編）修正というか変更（後書き）

あれ・・・？志貴の包帯について後半何も書いてないぞ・・・？ｗ
これ、やばくね？ｗあと千冬さんの言葉遣いってこんなんだっけかな・・・？原作読み直したほうがいいかねぇ・・・ｗ
次回からようやく１巻の内容です！
うーん、支離滅裂って言われても仕方ないなー。
読者が読みやすいように頑張るか・・・。
てか、志貴の年齢っていくつだ・・・？２０代なのはわかるが・・・、下手したら千冬より年上だよね？ｗどうしよう・・・ｗ

この小説にかんする告知のようなものですね（前書き）

これから書くことを配慮して見てくださるとうれしいです。
人によっては甘い考えに感じますが、そこは目を瞑って見逃してください・・・・；w；

この小説にかんする告知のようなものですね

まず、

1．感想を読んで少しでも悪い点があると内容を変更します。下手すると内容がグチャグチャになる変更もするかもしれません。

2．うp主はチキンハートなんでグサッっとくる言葉を言われると心が簡単にポキッってなります。

3．自己満足の塊でもありますので、読んで不愉快になる場合は今度、読まないことをお勧めします。

4．オリジナル設定もだすかもしれませんので、あしからず。

5．褒めてくれると某吸血鬼みたく「最高にハイってやつだ！」状態になります。（褒めていいのよ？（チラ

以上です。

これらを快く承諾していただける場合のみ、読んでもらえるとありがたいです。

ＩＳ学園（前編）（前書き）

はい、ようやく1巻の内容に突入します。志貴のＩＳに関してですが、考えた結果、学園側からの支給される、という形を取ろうかと思います。
さし当たって、ＩＳの設定と名前を募集してみたないなーなんて・・・ｗ
他人任せで申し訳ない・・・。
自分でも考えますが、思いつかない場合は募集という形をとると思います。
ぶっちゃけ、今回は志貴の紹介と志貴の立ち位置の紹介でおわるのかな・・？

ＩＳ学園（前編）

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲ（ショートホームルーム）はじめますよ！」
黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生（さっき自己紹介していた）。
身長はやや低めで、生徒のそれとほとんど変わらない。しかも服のサイズが合ってないのかだぼっとしていて、ますます本人が小さく見える。
また、かけている眼鏡も黒縁眼鏡もやはり大きめなのか、若干ずれている。
なんというか、『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さ・・・というより背伸び間がするんだが、そう思うのは俺だけなんだろうか。
「それでは、みなさん一年間よろしくお願いしますね」
「・・・・・・・」
けれど教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない。
「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」
ちょっとうろたえる副担任がかわいそうなので、せめて俺くらいは反応しておこうと思わなくもないのだけれど、いかんせんそんな余裕はない。
なぜか。簡単だ。俺以外のクラスメイトが全員女子だからだ。
と、織斑一夏は思った。
その一方で志貴は準備をしていた。何の準備かと言われると千冬の助手みたいなものだ。
なぜ、そんなことになったのかと言うと・・・、
「七夜」
「はい、なんですか？織斑先生？」
千冬に話しかけられ答える志貴
ちなみに、志貴が寮で寮長をする話は無かったことになった。とい

うか、当たり前である。
しかも、その寮を担当する予定だったのが千冬だったので、志貴はなお驚いた。
「お前には。私の助手をしてもらう」
「へ？」
千冬にそう言われたのが入学式１週間前のことだった。
「いや、助手って・・・？」
「七夜、お前の年齢を考えても高校１年生は無理があるだろう？」
「確かに・・・・」
そうそう、忘れていたがというか作者が年齢調べてなかったのが一番の原因である。
「というわけで、助手をしてもらう、ちなみに、決定事項だから拒否権はないとおもえ」
「え？さすがにそれは横暴じゃないですか？」
「知っているだろ？今のご時世を？」
「えぇ・・・って、だからと言って納得はできませんよ！？」
志貴が反論すると、
「ほぉう、私に反論とはいい度胸だな」
「さすがにいきなり助手で拒否権なしとか言われて反論しないほうがおかしいと思いますよ？」
千冬に言われ志貴がそう返すと、
「ふむ、なら寮長をやってもらうかわりに、助手の件は白紙にしてやって「すいません。助手をやらせてください。」いいだろう」
千冬の言葉に志貴は折れた。というか、折れざるおえなかった。
志貴がなぜ、そこまで寮長に拒否反応を示すかはまた別の話であったり、なかったり。
という無茶苦茶なやり取りがあったため、今、志貴は自分用に用意された個室で準備をしていた・・。
「あれ・・・？でも、具体的に助手といっても何すればいいんだ？」
そう思う志貴だったが時既に遅かっり

「七夜、準備はできたか？」
「えぇ一応は」
千冬に呼ばれたのでそう返事を返し、
「では、教室に行くぞ」
と言った千冬の後ろをついていくように志貴も歩き出した。
そうして歩くこと数分・・・
「さて、私が先に入って合図して呼ぶから呼ばれたらこい。」
「わかりました。」
そう言い、千冬が教室に入ると、
パアンッ！と音が響き、
「げぇ、関羽！？」
と男の子の声がして、
パアンッ！とまた音が響いた。
「（今のが、千冬さんの言ってた弟か・・・・。）」
と思った。
そして、千冬さんから「まだ、紹介してない人物がいるんでな、静かにしろ！！」
と聞こえたので教室の扉に手をかけ、深呼吸して入っていった。
一方一夏はというと・・・、
「以上です。」
がたたっ。思わずずっこける女子が数名いた。どんだけ期待してるんだよ。無茶言うな。
「あ、あのー・・・・・」
背後からかけられる声。涙声成分が二割増している。え？あれ？ダメでした？
パアン！いきなり頭を叩かれた。
「いっ――――！？」
痛い、と言うより無脊髄反射より、あることが頭をよぎった。
この叩き方――――威力といい、角度といい、速度といい、とある人物――――よく知っているとある人物と同じような感じなんですが・

・・・。
「・・・・」
おそるおそる振り向くと、黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているがけっして過肉厚でじゃないボディライン。組んだ腕。狼を思わせる鋭い吊り目。
「げぇ、関羽！？」
パアンッ！また叩かれた。ちなみにすっげぇ痛い。その音があまりに大きいから、見ろよ女子が若干引いてる。
「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」
トーンの低めの声。俺にはすでにドラの効果音が聞こえてくるんですが、はて。
――いやしかし、待て待て待て。なんで千冬姉がここにいるんだ？職業不詳で月に一、二回ほどしか家に帰ってこない実姉は。
「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」
「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」
おお、俺の聞いたこともないやさしい声だ。閑雲長はどこへ？赤兎馬に跨って去ったのか、劉備の元へ？
「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと・・・」
さっきの涙声はどこえやら、副担任の山田真耶先生は若干熱っぽいくらいの声と視線で担任の先生へと応える。あ、はにかんだ。
「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にある操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才まで鍛えぬくことだ・逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな。」
なんという暴力宣言。間違いなくこれは俺の姉・織斑千冬。
だがしかし、教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声援が響いた。
「キャ――――――――！千冬様、本物の千冬様よ！」
「ずっとファンでした！」

「私。お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」
「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」
「私、お姉様のためなら死ねます！」
きゃいきゃい騒ぐ女子達を、千冬姉じゃかなりうっとうしそうな顔で見る。
「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスだえ馬鹿者を集中させているのか？」
これが本当にうっとうしがってるのが千冬姉だ。千冬姉。人気は買えないんだぜ？もうちょっとやさしくしようぜ。
と思った俺が甘かった。
「きゃあああああっ！お姉様もっと叱って！罵って！」
「でも時には優しくして！」
「そしてつけあがらないように躾をして！」
女子達が元気でなによりです。
「で、挨拶も満足にできんのか。お前は」
と、千冬姉が言った。
「いや、千冬姉、俺は――――」
パアンッ！本日三度目。知ってる、千冬姉。頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬらしいよ。
「・・・はい、織斑先生」
――と、このやりとりがまずかった。つまり、兄弟なのが教室中にバレた。
「え・・・・？織斑くんって、あの千冬様の弟・・・？」
「それじゃあ、世界で唯一男で「ＩＳ」を使えるもの関係して・・・」
「ああっ、いいなぁっ。代わってほしいなぁっ」
最後のは放っておくとして・・・、
一夏がそう考えてると、
「まだ紹介してない人物がいるのでな、静かにしろ！！」

と叫んだ。
はて？どんな人物だ？
一夏を含めクラスの全員が頭に「？」マークを浮かべ千冬の言うことに耳を貸していた。
「入って来い」
ガララと教室の扉を開けて入ってきたのは・・・男だった。
「えーと、これから織斑先生の助手を担当する七夜志貴です。よろしくね」
と笑顔で答えると、クラスのほとんどの女子が顔を赤らめてうつむいた。

ＩＳ学園（前編）（後書き）

やばい、限界を感じたので一旦ここで切って前半にしたいと思います。
ぶっちゃけ、構成が浮かばんので無理やり切る感じですので、読みづらいと思いますが、ご了承ください。

思いつきという名の復帰（前書き）

思いっきり頭がおかしいようなレベルで妄想が爆発したので書いてみた＾ｐ＾

・・・・あと、失踪してたわけでは・・・・・ない・・・・・。

思いつきという名の復帰

殺人貴は視る

蒼と言われた力を――――――

その持ち主を――――――――

世界を――――――

「第６６６拘束機関解放・・・・！」

「次元干渉虚数方陣展開・・・・！」

「蒼の魔道書（ブレイブルー）起動！」

「来いよ・・・殺人貴！」

「――――――殺す」

蒼の魔道書の持ち主と蒼の眼を持つ２人が対峙する――――――

「ヒャッハー！いいねぇ！まさかこんなサプライズがあるなんてなぁッ！」

「ハザマ・・・・！てめぇだけはぜってぇ殺す！」

「いいねぇ！その威勢をコナゴナにしてやんよ！カスが！」

ラグナとハザマ――――

「て・・・めぇ・・・・・！なんだその力は・・・・！」

「今から殺す相手に教える義理はない・・・」

ハザマに迫る殺人貴――――

姫を殺し、世界から消えた殺人貴の新たな世界（ステージ）

「蒼の魔道書と蒼の眼」

始まります――――

「っていう夢をみたんだけど、志貴さん」

「疲れてるじゃないか？一夏？」

「そうなのかな・・・？」

夢オチでした。

思いつきという名の復帰（後書き）

はい、長い間更新放置しててすいませんでしたーーーーー！。

実はいろいろあって書く意欲がなくなっていました。

見てくださってる方々には申し訳ありませんでした・・・・。

まぁ、こんなの書くなら本編かけよって話ですよね・・・・（；・、д・´）

では、改めてここで言います。

亀更新に変更します（土下座

ゆるしてテへぺろ☆

あ、石は投げないで！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5671u/

IS 夢の果ての殺人貴

2011年12月6日23時49分発行